

●まちづくりシンポジウム in 高山

市民とともに世界に発信！

ユニバーサルデザインの都市・高山

〈パネリスト〉 土野 守^{1*}・白石真澄^{2*}・古田千尋^{3*}
〈コーディネーター〉 鈴木 誠^{4*}

鈴木 みなさんこんにちは。

只今ご紹介いただきました、岐阜経済大学地域連携推進センター長の鈴木誠です。

今日のシンポジウムの司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

今日は雪の中ではありますが、たくさんの方々にお越しいただきまして、ありがとうございます。

まず、最初に、今日のシンポジウムの趣旨を若干説明させていただこうと思います。

2005年2月1日に高山市は旧高山市と9つの町村が合併し、現在の高山市が誕生しました。

今年でちょうど3年になります。

この3年間で、ようやく市民の皆さんも色々なことが見えてきて、冷静にそして前向きにこれからの高山市でのまちづくり、みなさんの生き方を考えられるのではないかと思います。

全国の町々が合併をして、新しい町へと生まれ変わりました。

また、一方で、町々では、国際化や少子高齢化といった状況を、高山と同じように迎えています。

しかし、高山のように、こんなに大きな町が誕生したり、あるいは、30万人もの観光客の方がお見えになる、こういう町は全国他にはありません。

そして、都市とはいえ、中山間地域を多く抱え、森林面積が90%を超える町になるという点においても突出していると思います。あらゆる面で高山は、これからのまちづくりにおいても注目をされているということがわかります。

その中で、この高山市で暮らす市民の方々は

もとより、観光で訪れる内外の観光客のみなさんにとっても、過ごしやすい、そして訪れて楽しいまちづくりを目指していこうというキャッチフレーズのもとで、ユニバーサルデザインのまちづくりをはじめ、この点においても実は、大変に注目されています。

私も今年、ある町で、ユニバーサルデザインの指針づくりをやりましたが、その時、真っ先に資料を取り寄せ、話を聞かせていただいたのが、この高山市でした。

今日は、このユニバーサルデザインの取り組みをして、これからの高山をどのような町にしていこうと考えておられるのか、市長から存分にお話を伺いたいと同時に、このようなユニバーサルデザインをして、市政のみでできるものではありません。

市民のみなさん、さらには民間の事業者の方々が、これからのまちづくりをどう担うべきなのか？といったことを、全国各地の優れた領域からも参考にさせていただきながら、ここで話題提供していただこうと思います。優れたパネラーの方々をお招きいたしました。

そのような趣旨で、今日はユニバーサルデザインをキーワードとして、これまでの高山、そして、これからの高山を語り合って行きたいと思えます。

何より、今日は会場へたくさんの方にお越しいただきましたので、みなさま方にお話していただく時間を、僅かではありますが持ちたいと思えます。

質疑応答の時間には、どうぞ積極的にご参加いただきますようお願いいたします。

それでは、只今から、今日お越しいただきま

^{1*}高山市長、^{2*}関西大学政策創造学部教授、^{3*}共立総合研究所取締役調査部長、^{4*}岐阜経済大学教授・地域連携推進センター長

したパネラーの方々を、私の方からご紹介させていただきます。

まず最初に、向かって左側にお座りの、高山市長の土野守さんです。

土野 よろしくお願ひいたします。

鈴木 みなさま方はご存知でしょうか？高山市は、ユニバーサルデザインの視点に立ったバリアフリーのまちづくりを積極的に進めてきたということで、今年の3月13日に総務大臣表彰を受けられるそうです。

全国的に、この表彰を受けるには大変競争力が高くて、107件の中から、僅か25件が受章します。これまでの取り組みが評価されたということだと思います。

後ほど、ゆっくりお話を伺います。

続きまして、そのお隣に座って見えますのは、関西大学の白石真澄先生です。

白石 よろしくお願ひいたします。

鈴木 白石さん、高山は今回で何回目ですか？

白石 3回目です。

鈴木 過去2回と、3回目とを比較してどうですか？どんな印象を持たれましたか？

白石 1回目から3回目に共通して言えることは、やはり食への興味が尽きないということですね。

おいしいものがいろいろありますので、来たら高山のラーメンを買って帰ったりとか、今回は昨日から入らせていただいているのですが、ホテルで高山ラーメンとか地元のトマトケチャップとかを宅配便で自宅へ送りました。

先ほども、地元の有名なパン屋さんにも寄って、パンを2,500円分買ってきました。

何と言っても、食への興味が尽きない、これが共通していると思います。

しっとりとして落ち着いた町で、とても大好きです。よろしくお願ひいたします。

鈴木 食の話で、カロリーが大変気になるところですが、お隣は、共立総合研究所のエコノミストとして大変活躍されています、古田千尋さんです。

古田 共立総合研究所の古田です。よろしくお願ひいたします。

鈴木 古田さんは、エコノミストとして、随分フィールドワークをされていると思いますが、今日も町の中を歩いているいろいろな研究をされてきたそうですが、いかがですか？どんな印象を持たれましたか？

古田 高山には何回も来ていますが、本当に懐の深い町だなという印象を持ちました。

また、この場をお借りして、取材にご協力いただきましたNPO・また高山市内の企業の代表者の方々にお礼を申し上げます。

高山市では、来るたびに、新しい発見があり、勉強させていただいております。よろしくお願ひいたします。

鈴木 以上の方々をパネラーに、話を進めてまいります。

まずは、これから、パネラーのみなさんに15分ずつ話題提供をしていただこうと思います。

ここからは、自由に意見交換をしていきたいと思っております。その後で、パネラーのみなさんへ私からいくつか質問させていただきながら、そして会場のみなさんからも質問・ご意見をいただき、まとめていきたいと思っております。

それでは、みなさんのお手元に資料を用意させていただいておりますが、最初に、土野守市長より、「誰にもやさしいユニバーサルデザインのまちを目指して」と題しまして、話題提供をいただきたいと思います。

問題提起

■誰にもやさしいユニバーサルデザインのまちを目指して

土野 それでは、よろしくお願ひいたします。スライドにもありますように、私ども高山市は、誰にもやさしいまちづくりをしたいということで、いろいろとやっておりますことについてちょっとお話をさせていただきたいと思っております。

高山市は、ご案内のように平成17年2月1日に周辺9町村と合併をして、全国一広い2,180㎢という広大な面積を擁する市となっており、ちょうど4年目を迎えたところでございます。人口は平成19年4月の段階で9万5,400人ということで、合併後1,000人近く減ってきているとい

う状況でございます。また、高齢化率が大変高い地域で、合併前は約21.6%でしたが、現在はおそらく25%を超えた状況になっていると思います。

また、高山は観光地でございます、全国からたくさんのお客様にお越しをいただくわけですが、平成19年は大体435万人くらいのお客様にお越しいただいたのではないかと考えております。とりわけ外国からのお客様が増えておまして、平成18年は10万7,200人でしたが、平成19年は13万3,000人近い各国からのお客様に来ていただいております。

そういう高山ですが、一方では、高齢化が進んでくると同時に、市民の方のなかに障害者手帳をおもちになる方が大変多くなってまいりました。市民の約5%強の方が障害者手帳をおもちになっているわけです。しかも、先天的な障害の方は少なく、後天的な障害をおもちの方が多くなってきている。加齢による障害とか交通事故とかいろいろ理由はあろうかと思いますが、そういうことでまちに出にくいという方が増えているという状況がございます。

また、高齢化と同時に、高山に観光にお越しをいただく方々のなかにも、からだのご不自由な方が多くなってきているということがございます。そういう方々も含めて、過ごしやすいまち、住みやすいまちづくりが必要だということで、まちづくりの理念として「住みよいまちは行きよいまち」ということを一つのコンセプトとして、ユニバーサルデザインの考え方に基づくまちづくりを進めているところでございます。

高山市では約10年ちょっと前からバリアフリーのまちづくりに取り組んできたわけですが、当初はバリアフリーのまちづくりをするにはどうしたらいいかということ考えたわけですが。本来ですと、有識者の方やここにいらっしゃるような先生方にお集まりいただいているいろいろなご提言をいただき、それを役所のなかで検討し予算化をして事業を進めるといったパターンが一般的だと思います。しかし、それでは少しスピード感に欠けるということで、私どもとして

は、障害をおもちの方に高山に来ていただいて、どこにバリアがあるのか直接聞かせていただくことによって対応したらどうだろうか、それによってスピードアップしたいという考え方のもとに、モニターツアーというのをさせていただいております。

これまで19回、延べ369名のいろいろなハンディをおもちの方にお越しいただいて、貴重な意見をちょうだいしてきたところです。市外からの障害をおもちの方というのは高山を知らない方ばかりでございます、高山へ来て、どんなところに問題があるかとか、どういうことを解決したらいいかというようなことを率直に言っていただきたいということから、すべてを市がもつのではなく、交通費等はご自分の負担で来ていただき、そのかわり遠慮のない意見を出していただくということでやらせていただいたわけです。

初期の段階では厳しい意見が大変多ございました。こんなことまで言われるのかというような意見もたくさんあったわけですが、予算と相談しながら、解決できるところは一つひとつ解決していくということで対応させていただいてきたわけです。

そのなかで一番基本になったのは、車椅子等でまちを歩こうと思っても、道路に段差が多いとか、グレーチングの目が粗いとか、いろいろ支障があるというご意見が多ございましたので、まず最優先して道路の改修に着手をさせていただきました。高山駅を中心とした1km圏内を重点整備区域として、現在までに、主要な公共施設と福祉施設とを結ぶ幹線道路の歩行者を対象とする部分、それから商店街の連なる通り、あるいは車道と側溝や路肩に段差があって歩行に支障を来すような道路について、段差解消、グレーチングの変更というようなことをさせていただきました。車道とフラットになった歩道と合わせて、歩車共存型の道路というような形にしてきたところでございます。

それから、まちのなかを散策していただく、あるいは買い物に出ていただくという場合に、トイレが心配だというご意見が大変多ございま

した。公衆トイレの整備が不可欠だということで、公衆トイレの整備に力を入れてきまして、高山市全体で約80カ所の公衆トイレ、さらに民間施設等で開放していただいているトイレが約50カ所ございます。この130カ所のトイレについてはすべて車椅子対応が可能ですし、最近では多目的型のトイレに改修をする、あるいは新設をするということもしております。また、腸の疾患等によりオストメイトをつけておられる方が多くなってきておりますので、オストメイトにも対応できるようなトイレとか、あるいはユニバーサルシートを設置するとか、いろいろなことでトイレのグレードを上げていくと同時に、快適に使っていただくということで、1日に2回くらいは清掃を行って常に清潔を保つことにも気をつけているところです。

そういうようなことで、最初は私どもも行政が主となってハード面の整備を進めたわけですが、民間においてもバリアフリーについての認識が大変深まってまいりまして、民間施設についてもいろいろなバリアフリーへの対応をしていただいているところがございます。

私どももそれを推進するために「安全・安心・快適なまちづくり事業補助金」を創設して、事業費の2の1まで、200万円を限度として補助をさせていただいているところです。また、車の乗り降りがしやすくなるサポートシートというものがございますので、タクシーにこういうものを設置される場合にも助成をさせていただいております。さらには、中小企業の方がバリアフリー化を行うための費用として、600万円を限度に無利子の融資をするというような制度も平成18年から設けているところです。

民間施設のバリアフリー化の例として、例えば車椅子の方がホテルの大浴場へ入りたいたいと思ってもなかなか入れないというご意見がございました。これをホテルで受けていただいて、車椅子で入れるように設備をつけるとか、あるいはユニバーサルルームとかコントラストルームをつくるというようなことをしていただいておりますし、タクシーにはサポートシートをつけていただいております。

ハード面だけではなくて、ソフト面でのバリアもいろいろあるわけですが、とりわけ情報のバリアの解消ということが重要ではないかということで、情報提供についてもバリアフリーを行っております。これはまだ5カ所しかございませんが、バリアフリー観光情報端末というものを車椅子利用者が利用しやすい位置に設置するとか、音声、文字、手話アニメーションによる案内を行うというようなことも行っております。

そのほか、市のホームページをご覧くださいますと、バリアフリー規格で定めている JIS 規格に合わせて音声とか拡大文字による表記をしております。また、外国人の方にたくさん来ていただきたいということで、観光のページについては現在11言語で表記をしています。11言語の表記というのはほとんど例がないのではないかと思います。また、市内の案内看板については4言語、それから観光パンフレット等については現在は8言語までつくるなど、言語のバリアフリー化ということも行っております。さらに点字とか音声での「指と音でたどる観光マップ」とか、「車椅子おでかけマップ」を作ったり、事業者向けに障害のある方や外国人への対応で心がけるといいことなどを記した「おもてなし356日」というような冊子を作って、少しおせっかいな面があるかと思いますが、民間の方々にもご協力をいただいております。

また、民間のほうでも「おもてなし研修会」というのを毎年開いていただき、いろいろなソフト面での対応をしながら、からだの不自由な方、あるいは外国人の方へのよりよいおもてなしを目指して努力をいただいているところがございます。

モニター旅行も回を重ねてくるなかで、利用できるトイレが多くて安心できるとかいうご意見をいただく一方、最近では、点字ブロックが通行のじゃまになるとか、道が平らになりすぎてどこを歩いているかわからないとか、聴覚障害の方からは、緊急情報は文字でも伝えることが必要ではないかとか、いろんなご意見が出てきております。障害によって考え方がずいぶん

違うわけですし、これが終わればそれでよしというわけにいかないということで、よりきめ細かな対応が求められているというのが現在の状況でございます。

外国人の方のモニターツアーの意見としては、「ホームページ上の観光情報の多言語化は、とても見やすい」とか、「日本旅館での習慣など基本情報をまとめたものも多言語化してほしい」とか、「広げられる詳細な地図も、より多言語化を図ってほしい」というようなご意見がございました。先ほど申し上げましたように、パンフレット類では8言語、インターネットでは11言語というようなことで対応させていただいておりますが、さらなる充実が必要ではないかと考えています。

私どもはそういうことでいろいろとまちづくりを進めてきたわけでございますけれども、平成17年3月に「誰にもやさしいまちづくり条例」というものを制定して、より誰にもやさしいまちづくりを進めたいということを考えております。そういうなかでは、バリアを生まないユニバーサルデザインのまちづくりというものを基本に、ソフト面の基本的な施策も、施設整備等ハード面からも、高山市と市民の方と事業者が一体となってまちづくりに取り組んでいくことが必要だということを定めております。施設整備の面におきましては、ハートビル法による基準適合義務をさらに強化して、対象となる建築物の追加とか、面積規模の引き下げ、整備基準の追加などを行って、よりやさしい施設になるように務めているところでございます。

また、市民の皆さんに対する啓発ということも重要ですが、とりわけ子どもさんに対する啓発が重要ではないかということで、平成19年4月には、一般向けの啓発資料とともに、小学校6年生を対象とした学習資料を作成し、子どもさんにもこういうことについて理解を深めていただくように行っているところです。小学校の出前講座でもいろいろな話をさせていただき、生徒の皆さんからは「市が一生懸命取り組んでいることがわかった」とか、「ずいぶんお金を使っていることに驚いた」とか、いろんな意見

が出てきているわけですが、前向きな意見をいただいているというのが現状でございます。

また、条例に基づいて「誰にもやさしいまちづくり認定制度」というのを設けて、ユニバーサルデザインに配慮した施設等ハード部門と、サービスの提供というソフト部門で積極的に取り組んでいる事業者を認定するというのを平成18年度から始めております。認定した事業者の方には、認定証の交付式を行ってそれぞれのマークをさしあげ、事業所の入り口なり施設等に貼っていただくことで、よりユニバーサルデザインについての認識を深めていただくということをしております。

いずれにしましても、バリアフリーあるいはユニバーサルデザインのまちづくりには、予算の問題、あるいは時間的な制約が伴ってまいります。また、先ほど申し上げましたように、バリアフリー化がまた新たなバリアを生み出すというようなこともございまして、乗り越えなければならない課題が次々と出てきてエンドレスだということがございます。

二つ目としまして、高山市には重要伝統的建造物群保存地区とか国の重要文化財になっている建物とかいろんなものがございます。そういう施設については、文化財の価値を損なうことなくバリアフリー化あるいはユニバーサルデザイン化するという難しい課題がございまして。そういうところも何とかうまくやっていきたいということで、所有者の方等のご協力をいただきながらいろいろな対応をとらせていただいているところです。

いずれにしましても、日本一広大な市域となった高山市でございますので、ユニバーサルデザインのまちづくりを全市的にどのように浸透させていくかということが大きな課題でございます。また、費用あるいは時間のかかることですので、市民の皆さん方のご理解、ご協力をいただきながら、誰もが安全に安心して快適に過ごすことができるまち、「住みよいまちは行きよいまち」ということで高山市としては今後も努力していきたいと考えているところで

少しはしよった説明で恐縮でございますが、高山市における取り組みの状況をご紹介させていただきます。

鈴木 どうもありがとうございました。

市長のお話のなかに、バリアフリーという言葉とユニバーサルデザインという言葉が飛び交っておりました。バリアフリーというのは、もともとまちなかにあるバリア、道路の段差とか、側溝のところのグレーチングといわれるもの、あるいは乗り物では乗降口のところの段差とかいう物理的なこと、それから制度的なことでもバリアある。そういったすでにあるものを後からなくしていこうというのがバリアフリーの考え方です。

そうではなくて、初めからそういったバリアをつくらないという取り組みをユニバーサルデザインというわけです。すべての市民が安全に安心して暮らせるようにしていくために、性別とか年齢、それからからだの特性、また国籍も含めて、違いなどをちゃんと受けとめながら、誰もが過ごしやすいまちづくり、あるいは製品やサービスを心がけていこうというのがユニバーサルデザインというもので、人々の意識とかいうところも大事にしていこうということになります。

高山市はそういう観点でモニターツアーから始めてきたというわけですが、このあたり、実際に訪れた感触はどうなのか、ぜひ高山市外からおいでの方の2人のパネリストに伺ってみたいと思います。

白石さんにはテレビでお目にかかってみえる方も多いのではないかと思います。国の仕事を

はじめとして、ユニバーサルデザインさらにはバリアフリーの研究という点でも注目されるたくさんの方の発表をされております。全国各地のすぐれた取り組みも含めて、ユニバーサルデザインのまちづくりに向けて白石さんの考えをご紹介いただこうと思います。

■ユニバーサルデザインの可能性

白石 よろしくお願いたします。

今日は前半で、まちづくり提案コンクールに応募された学生さん方の作品を拝見させていただき、とてもすばらしい企画だなと思いました。皆さんがこうして書いていらっしゃることは情報発信なわけですけれども、これから人も地域も、日本だけではなく世界が相手になってくると思うのです。今はお子さんがだんだん少なくなって、皆さんと同じ年代にいる人たちは100万人ですけれども、インドや中国には、皆さんと同じ年齢の人たちがそれぞれ1,300万人ずついる。こういう人たちとこれからはよき仲間でありライバルであるわけですから、自分がどういう考えを持っているのか、自分は何を発信していきたいのかということとをきちんと相手に伝えていくという能力はとても大事で、こういう機会を提供されました市長さんをはじめ関係者の方に、私からも感謝を申し上げます。ぜひこれからも書くということを大事にさせていただきたいと思います。

さて、今日のテーマでございますユニバーサルデザインについては、いろんな方から「ユニバーサルデザインって具体的にいったい何でしょう」と聞かれることがあるのですが、それは「もの」ではなく、考え方、理念だと思います。

例えば私たちが日ごろよく目にするバスは、ステップがあって床が少し高いバスです。これは高いハイヒールを履いていたり、ベビーバギーを引っ張っているお母さんや大きな旅行かばんを提げている人は乗りにくい。でも、床の低いバスであればひよいと気軽に乗れるわけです。

アメリカなどでよく走っているのにリフト付きのバスがあります。ステップがあるためにバ



スに乗れない人たちのために、別途改造してリフトをつけでありますから、より多くの人たちが乗れるけれども、リフトを上げたり下ろしたりするのに時間がかかってしまいます。スウェーデンとかデンマークでは、ニーリングというひざをつくような形で片方が下がるバスがすでに走っています。困っている人がいるからそこに何かしましょうというのではなく、最初から床の高さを低くして地面に近づけてやれば、より多くの人たちが乗れるわけです。

では、ユニバーサルデザインが床の低いバスかということ、そうではないと思います。障害のより重度の人たちはベッドのような車椅子を利用している場合もあります。その人たちは床の低いバスにすべて乗れるかということではなくて、ほかの乗り物が必要であるのです。そういうふうに考えれば、ユニバーサルデザインは、より多くの人たちが利用しやすいように考えていく方法のことであって、どんなにいいものをつくってもそこから排除される人たちが一定割合いる。こういうことを前提として考えていかなければいけないし、そこから排除される人、使えない人たちをどうしていくのかというのは、今からお話しさせていただくように、情報提供をするとか周りの人たちが支援をすることかいうように、ほかの方法を考えていくべきではないかと思うのです。

私は高山は今日で3回目ですけれども、高山市さんが日本中で有名になる前からこの地域を注目しておりました。いろんな行政の方からどこを見に行ったらいいか聞かれると、必ず勝手に名前を挙げさせていただくのがこの高山と青森です。熊本とか北九州もがんばっていますが、高山も観光に力を入れ、住んでよし訪れてよしのまちづくりを実践していらっしゃるということで、名前はもう日本中にとどろいてるのではないかと思います。

古い歴史的な建物があるところを全面改造していくことはなかなか難しいのですが、歴史や伝統を重視しながら、より多くの人たちが参加していけるようなまちを意識し実践を始めている。市長さんからお話ががあったように、130カ

所のトイレということだと、人口あたりの多くの人たちが使えるトイレ密度というのはきつと日本一だと思いますし、情報提供にもすごく力を入れていらっしゃる。私は、そこに使えるものがあるということと、それが本当に使いやすいかどうかというのは全然別だと思うのです。つくって安心してしまうケースがあるわけですが、「ここにこういうものができましたよ」「何時から何時はここが利用できますよ」という情報提供をあわせてやっていくことによって、本当の意味で使いやすいものになる。そういうことにも力を入れていらっしゃるのではないかと思います。

ではこれから高山市でどういうことが必要かということ勝手に考えたのですが、やはり面積が大きい地域でございますので、ここにお金と時間をかければ際限なくいいものができるわけですが、財政状況も全国津々浦々厳しくて、面的にすべての地域でユニバーサルデザインをやっていくというのは無理だと思います。やはり地域を決めて、重点的にやっていくところはどこなのか優先順位をつけてやっていくということになると、市民の皆さんたちと一緒に考えていくことが重要ではないかと思います。

また、多くの建物は民間が所有し運営をしております。いくら行政ががんばって旗を振っても、市民の人たちの意識がついてこなかったり、ハードの建物や交通で不備なところを支援してくださるような団体がなければ、それはちょっと困ったことになってしまいます。

国内外に向けた情報発信というものにも相当力を入れていらっしゃるわけですが、これもきつとほかの地域が追いつけ追い越せとやってくるに違いありません。高山市を目指せ、トップランナーを追い越せということではほかの地域もがんばってきますので、新たな情報発信の仕方を考えていく必要があるのではないかと思います。

私は、これからは科学技術の力というものに相当注目していくべきではないかと思っています。今までできなかったことが、これからは科学技術の力でできるようになる。例えば道路を歩い

ているだけで、その摩擦によって電気が起こる。こういうことは20年前にはあり得なかったわけですから、いろんな技術が利用できるということを考えれば、このユニバーサルデザインにとっても何らか新しい可能性が出てくるような気がします。



ここからは少しデータをお示ししたいと思います。

岐阜県全体の人口をお子さん、働き盛りの人、65歳以上の方に分けてみると、100人いらっしゃると22人がすでに65歳以上の方なのです。こういう数字をとらえてよく困った、困ったと言いますが、私は全然困ることはないと思うのです。ほとんどの方はお元気で意欲的な方でございますし、65歳を過ぎてなお社会のお役に立ちたいと思う方がいらっしゃるということは、地域の貴重な宝でございます。内閣府でも高齢者の定義を65歳から70歳にかえようということを言い始めていますが、元気で時間もおありになる方が地域にたくさんいらっしゃるということはメリットに近いのではないかと、こういう人たちを活用しない手はないのではないかと思います。

岐阜県全体では現在出ていく人のほうが多いのですが、浜松や群馬、太田などは日本でも有名な外国人が増えている地域で、実は外国人の方は増えたり減ったりしながらも転入のほうが多いのです。外国人の方イコール観光客や一時的に滞在している方と考えがちなのですが、私たちと一緒に生活をする外国籍の方が増え始めている。そして、昨夜、私は高山のアソシアリゾートに泊まらせていただいたのですが、温泉に入れば聞こえてくるのは韓国語とか中国語、

私が「どちらからですか？」と聞いた方は「台湾からです」とお答えになるというように、観光客のなかにも外国人の方が増えています。

これから50年すると日本はもう1億人を切りますので、地域を元気にするためには日本人だけでということを考えてはいけないうわいで、より外国の方にも親しみをもってもらいたく必要がある。観光情報なども、紙では、印刷をするのも、それを津々浦々に届けていくというのも大変なことです。新しい技術の力を使っていく必要があるのではないかと思います。

さて、1世帯当たりの人数が2.9人と3人を切ってきました。また、飛騨高山地域はほかの地域よりもより高齢化が進んで、27.8%ですから3人に1人くらいが65歳以上ということでございます。何が言いたいかというと、ひとり暮らしとか高齢者の人たちが増えているということです。ですから、日常的な見守りを要する人が増えているということです。お元気な方だけれども、やはり80、90になってくると年齢とともに見守りがいる。まちなかで何となくふれあいをしながらそういう人たちに声かけができたり、安否確認ができるような仕組みをつくっていかないと社会的な孤立が生じるということでございます。自然な形のなかでふれあいをどうしていくかということも常に考えていく必要があろうかと思えます。

それから、市長さんが市民のなかに障害者手帳をもつ人の比率が増えているとおっしゃいましたが、県全体でも障害者の方が4年間で7,000人増えています。これは高齢化とともに、障害とおつきあいをしながら暮らしている方が増えているということだと思います。

身体障害の方は車椅子に乗ったり、杖をついていらっしゃるということで、外から見やすいのですが、内部障害とか聴覚障害とか、外見で障害を判断できない方たちが増えてきているということにも注目する必要があるのではないかと思います。障害のわかりやすさという点においては、気づきにくい種類の障害をもつ人たちも増えているということでございます。

さて、まとめなのですが、これからバリアフリー、ユニバーサルデザインを実現していくためには、私は民間の力というのがとても大事だと思うのです。20年前は、障害者や高齢者の人のためにまちづくりをやったり、民間事業者がいろいろ努力して、「それでもわかりませんか？」という発想でした。しかし、今は相当考え方が変わってきていて、いろんな仕掛けやサービスをすると人様が来てくれる。やはりユニバーサルデザインやバリアフリーというのは民間事業者にとっても何らかのメリットがあるのだということに、多くの方が気づき始めたのではないかと思います。

例えば都内のある有名なホテルで、オムライスとかハンバーグの半分の量というのがメニューにあるのです。これをーフモーションというのですが、全部食べるとカロリーが多いと考える人とか、ダイエット中の人とか高齢者の方はたくさん召し上がれないので、量を半分に減らしてもらえる。でも値段は3分の2ですから詐欺みたいなものですね。つまり事業者の人たちは高く売っているわけですが、お子様や高齢者の方やダイエット中の女性などは、それを食べて満足しているわけです。努力をすればそういうものが広まっていくということです。

これも有名なホテルですが、ワンフロア全部マスターズフロアということで、従業員は全員救急救命の研修を受けています。そういうことであればお年を召した方が泊まっても安心ということで、いろんなメディアが取り上げて宣伝をしてくれるわけですから、全国に広まっていく。そういうように、民間の知恵を生かしてソフトを充実していく必要があるのではないかと思います。

そのためには市民の方一人ひとりに意識をもっていただく。自分のまちの使い勝手の悪いところは何だろうということで、モニターさんに来ていただいて貴重な意見を出してもらってというお話がございましたけれども、そういう意見を一つひとつ取り入れていくことによって住民参加意識も高まってくる。よりよいまちを

みんなで作っていかうという機運を盛り上げていくことが重要なのではないかと思います。

ここからは具体例をお話しさせていただきたいと思います。

過疎地域でのバリアフリーの取り組みとしては、兵庫県淡路市の長沢地区は乗り合い回りカーというのが市内8コースあって、1日4便運行しています。

私は、これからは血管でいえば手の毛細血管のような交通網が必要になるのではないかと思います。皆さんはマイカーで動いていらっしゃると思うのですが、いつしか車の運転をあきらめなければいけないときがきます。病院に薬を取りにいきたいと思っても、車がないと出れませんし、ましてや雪の降る冬場というのは怖いのです。そういうときにこういう小回りのきくコミュニティバスというのが有効なのです。要は白タクでございます。白タクはいけないんじゃないのと思われるかもしれませんが、これが認められるようになりました。地域で運営協議会をつくってきちんと話し合いをし、ドライバーの人が研修を受ければ、2種免許をもたない人でも運転ができるのです。

この長沢地区では、各世帯1万円負担して、運転手さんは住民でございます。10人乗りのワゴン車を使って、片道30分であれば、路線バスがない地域まで自由に行ってもらえる。予約をしておけばなおよろしいということで、いろんな地域の隅々まで人を運んでくれるということです。これからは行政にすべておんぶに抱っこではだめで、行政もお金がございませんで、地域に必要なサービスを住民が生み出していくということが重要ではないかと思います。

次はソフト面でのバリアフリーの例です。高山市さんも「おもてなし365日」という冊子を作っていたりしますが、町田市では、ハンドブックを作るにあたって障害のある当事者の人たちが編集に携わったり、何回も市民の人たちに意見を聞いて練り上げていって、当事者の納得が得られるまでそれを出さなかったという例です。

これは、まず声をかけようという運動から始

めていったのです。自分が何をしたいかわからないけれども、声かけくらいはできるということで、「ひと声あいさつ」がそれをきっかけにできるようになったとか、困っていそうな人を見たら声かけるということから始めて、こういう冊子を作ることによって住民運動につなげている例でございます。

平泉も世界遺産に登録されることが予想されていますから、高山のライバルだと思えますけれども、どういうことをやっているかということ、携帯電話でいろんな情報を出しているかということを取り組んでいます。これについては政府としても社会実験をしまして、私は札幌の社会実験に行かせていただいたのですが、例えば北海道の歴史資料館にトランシーバーのような電話が置いてあって、チップを替えるだけで北海道の開拓の歴史がいろんな言語で案内できるというものです。つまり中部空港に入ってきた人にレンタルで電話を貸して、言語のチップを替えることによって、モンゴル語とかハングルとか広東語とか北京語とかで観光地の情報が届けられるというもので、平泉は岩手県立大学と一緒にそういうことに取り組んでいます。

これは商業者にとっても民間事業者にとってもメリットがあって、今朴葉みそが安いですよとか、こういうのをお土産にどうですかというふうに地域の名産情報を流したり、何名限定で半額で入れますよということをオンタイムで流すことができるのです。そういう新しい機器を使った情報提供ということも、これから可能性の一つとしてあるのではないかと思います。

鈴木 コミュニティバスは特に中山間地域の多いところではとても可能性のある方法だと思いますが、全国でどれくらいあるのですか。

白石 去年の数字で73地域です。市民のNPOがやっているところもあれば、大阪の枚方などではタクシー事業者も入っています。国土交通省はそんなのをやるとタクシー会社が困るのではないかというようなことも懸念したようですが、タクシー事業者さんにとってもお客様が固定的にあるということはずごくありがたいこと

で、タクシー会社も一緒になってやることによってマーケットが広がったと聞いております。

鈴木 ありがとうございます。今のような日常の生活感覚から、ユニバーサルデザインというのは市民にとっても企業にとっても本当に可能性があるというところのお話は、また後でたくさんいただこうと思います。

続きまして、古田さんはエコノミストで、共立総研という東海地方を代表するシンクタンクの研究員をしておられるわけですが、あわせて、地域のなかで町内会活動をはじめとした地縁組織のいろんな活動やPTA活動などを熱心にやられています。今日はそんな話もいただけるかもしれませんが、古田さんからは、高山市の主要経済指標を見ながら、ユニバーサルデザインはどんな可能性を秘めたキーワードなのか解説していただこうと思います。

■主要経済指標などから高山を考える

古田 共立総合研究所の古田でございます。日ごろは共立総合研究所ならびに大垣共立銀行をごひいきいただきましてありがとうございます。

高山市というと、今まで私は、古い町並みなどが遺産だ、いい財産だなどと思っていましたが、今日は高山市のすばらしい中学生の皆さん、すばらしい市民の方々がおられてうらやましいかぎりです。私の席に来て話してもらったほうがいいのかなと思うくらいですけれども、そうはいきませんのでお話をさせていただきます。

地元にいるとなかなかわからないかもしれませんが、飛騨高山というと、これは岐阜県最上のブランドではないかと思うのです。飛騨高山というだけで品格とかがイメージとして出てくるのです。例えば東京で飛騨高山というと、飛騨の匠の里で、住んでいる人も心がきれいで、まちもきれいで、川が澄みきっていてというイメージをみんなもっていて、実際にそういう方々が観光にみえるのです。

そうはいうものの、そのブランドを維持し発展させるのは皆様方でございますし、まちのイメージというのはとても大事でございますの

で、そのためにどうすればいいのか私なりに考えたことをこれからちょっと説明させていただきます。

まちづくりうんぬんもちろん大事ですが、私は、基本的にまちが発展するためには、雇用をいかに確保するかが重要なポイントだと思います。いくらまちづくりをいろいろやったところで、まちに働く場所がなかったら人口はどんどん減ってしまいますので、そうするとまちづくりもなかなか難しいという話になってしまいます。

高山市の人口は今からどんどん減っていくことが予想されています。どれくらい人が減るかというのと、生産年齢人口といって15～64歳の人口推移は日本全国と似たようなもので、特に95年から2000年、2005年にかけて人口が減っています。そうすると、例えばデフレの話もこれに結びつくのです。15～64歳の働き盛りの人の数が減ってくれば、昔と同じように日本のいろんなところでものをつくっていますけれども、当然ものが余ってきます。ものが余ってくると売れなくなる。売れないので値段を下げるといふことで、デフレもこの生産年齢人口の減少といふことで説明できるのです。

年少人口は右肩下がりになっていき、逆に上がってくるのは老年人口です。これは日本全国も基本的に一緒です。昔は年少人口がけっこうあったのですが、1980年代の後半からまちのおもちゃ屋さんやどんどん姿を消して行って、おもちゃ屋組合というのが日本から姿を消したのが90年代の初め、バブルの真っ盛りのころでございます。要はそういうふうには子どもの数が減って行って、老年人口がどんどん増えてきたわけですが、全国的にバリアフリー、ユニバーサルデザインというのが認識され始めたのが、そのクロスする90年代の中ごろです。要はお年寄りの数が増えてきた。おれもちょっと弱ってきた、駅の階段がきつからエスカレーターがあるといいね、あるいは家のなかでもう少し歩きやすくなっているといいよねとなってくるのが、地域によって違いますけれども、基本的には90年代の真ん中あたりでございます。

今日の顔ぶれを拝見すると40代、50代、60代の方が見受けられますから、老年人口の推移の話をも人の話と思って聞いてみえる方も多いかもしれませんが、明日はわが身ですから、そのへんはお忘れなく。少子高齢化も自分には関係ないと思ってみえるかもしれませんが、どなたにも必ず関係してきます。

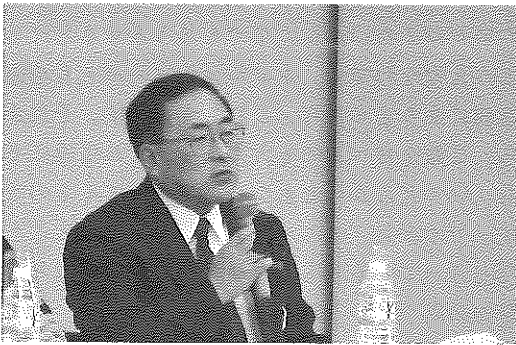
私の56歳のいとはスポーツマンで、朝起きて野球をやったりしていたのですが、突然脳梗塞になって、右手が麻痺して、左手で生活しなくてはならなくなって困っております。運転もできません。ボタンをかけたりするのも、それから、女性の方もみえますので恐縮なのですが、トイレも困るという状況です。今まで右手でボタンをスイッチして水を出していたのが、右手が使えないから左手でやろうとするとけっこう大変なのです。トイレトペーパーも全部右側にありますから、これも大変です。それから、ご飯を食べるのも大変です。これは誰にでも、いつどこからともなく突然やってくるのです。ですから、ユニバーサルデザインは人ごとだと思っているかもしれませんが、明日はわが身のお話だといふことでございます。

生産年齢人口が減ってくるとどういうことが起きるか。国立社会保障人口問題研究所が全国の市町村について出している統計によりますと、総合人口は少しずつ減っていきませんが下がり方はそんなに急激ではない。しかし、15～64歳の人口、つまり実際に働いてみえる就業者の数はかなり減っていくことがわかります。この生産年齢人口には高校生なども入ってきますし、就業者数には実際には65歳を超えている方が入っているかもしれませんが、基本的には就業者の数が減ってきます。

働く人の数が減ってくると課税対象所得、高山市内の所得が減ってくるというのは当たり前の話でございます。そうなってくると税金を納める人の数も減ってきますから、歳入が減ってきます。そうなるとう当然歳出も減ってきます。歳入のなかにはいろんな補助金関係も入ってくるかもしれませんが、これからはそういうものも減ることが予想されますから、実際にはかな

り厳しくなってくる可能性があります。そうすると高山市としては何で飯を食いますかという話になるのです。

高山市の総生産の推移を見ますと、1998年に少し高くなっています。1998年は第2次産業の建設業の調子よかったものですからちょっと高くなっていますが、基本的には大きな変化はありません。高山市というのは何で飯を食っているかという、一番低いのは第1次産業の農林水産業、その次は第2次産業の建設業とか製造業で、その代表的なのは木工ですね。高山では第3次産業のサービス業とか小売業、それからホテルなどが一番大きいシェアを占めています。



高山市は全国と比べてどのくらいものが売れているかどうかを調べました。そうすると、97年ですから今から10年くらい前がピークで、そこから先は基本的に下がっています。97年という消費税が3%から5%に上がった年なのですが、そこがピークで、それから先は下がり始めました。それから、総人口はそんなに変わっていないけれども、働き盛りの人が減り始めました。もし働き盛りの人が増えれば、家も1軒余分に売れたかもしれないし、車も1台余分に売れたかもしれないけれども、そういう人が減ってきましたから、当然ものが売れなくなったという話です。

一つずつの小売店の平均販売額は基本的に似たようなもので、97年以降ほとんど横ばいに近いです。ただ、高山市のなかの区域別の売上の推計を見ると、ずいぶん勝ち負けがはっきりしています。さんまち通り商店街は観光客でにぎ

わっている地域ですが、ここだけが右肩上がり、あとは基本的には、残念ですけれども右肩下がりで、いわゆるまちの中心部になるところが少しずつ厳しい状況になってきている。

ユニバーサルデザインに関していえることは、もちろん観光客を大事にすることも大事ですが、まちの中心市街地に住んでいる方々を取材したときに、西小学校区もどンドン人が減ってきて、今度幼稚園と保育園が合併しますという話を聞きました。中心市街地で人が減るということは、売っているものがそれぞれ違いますから、商店街だけではほしいものがそろわなくなって、ちょっと具合が悪いけれども遠くのショッピングセンターまで行こうかという話になってくる。しかし、皆さん厳しいですから、そのへんの買い物のしやすさということも大事かなと思います。

岐阜県が、飛騨と高山市の人々に、今どこで買い物をしていますかというアンケート調査をしてまとめたものを見ますと、10年前は、例えばスーツとかハンドバッグとかいったちょっと値が張るいわゆる買回り品を、高山市の中心部で買う人がけっこう多かったのです。ところが、2006年になるとそういう人が減って逆に旧高山市で買う人が増えている。これは、ここ10年くらいの間に郊外にショッピングセンターがたくさんできたために、そちらで買う人が増えたということです。旧国府町もアピタができてから伸びています。それから、富山県とその他県外も増えています。

今度東海北陸道が貫通すると、それが高山市にどういう影響を与えるか。元気だから富山県に行こうかとか、その他県外には、長野県あるいは石川とか福井まで入るかもしれませんし、もちろん愛知県で買い物される方もけっこう多いのですが、交通の便がよくなればなるほど、基本的には観光客は増えますし、交流人口も増えるとは思いますが、一方、高山市の市民がどこで買い物をするかということになると、やはり外へ行く人も増える。便利になるということは逆にそういうことなのです。ですから、そのへんの対策をきちんと考えないといけないと

いうことです。

観光客と消費額の推移を見ると、両方ともそこそこ増えてきましたが、ここにきてちょっと横ばいになりつつあります。毎年の数値をそのままグラフにするとブレが激しくて傾向がわかりにくいものですから、5年ごとの平均値であらわした特殊なグラフで見ると、観光客も消費額も増えているけれども、ここにきて伸び率がちょっと悪いということがわかります。

では宿泊者がどれくらいのお金を使っているか、それから日帰りの人がどれくらい使っているか、そして平均してどれくらいお金を使っているかという、2000年のころは宿泊客はけっこうお金を使ってくれたのですが、ここへきてちょっと横ばいになっている。それから日帰りのお客さんも横ばいという傾向がございます。

高山へ実際に遊びにこられる方はどこからみえるのか、どこからみえるお客さんを大事にしなければいけないかという、岐阜県内が14%、それ以外の東海三県が29%、関東、関西が大体2割ずつくらいです。外国からのお客様も5%みえますが、基本的には日本人のお客さんが多いです。特に関東のお客さんにとって飛騨高山というのは最強のブランドで、岐阜県は知らないが飛騨高山は知っているという人がけっこう多いです。

今度は高山に泊まりにくる外国人の方はどういう方が多いかという、台湾の方がほぼ5割です。それから、ヨーロッパとか北米とかオセアニアの方が、合計するとこれも同じくらいみえます。逆に韓国が意外と少ないのです。日本全国では韓国の方が31%で一番多いのですが、高山に限って言えば台湾の方が多いです。

外国の方がどこに行かれるかという、関東とか関西が多いです。関東地方では東京ディズニーランドとか秋葉原など、関西では京都とかユニバーサル・スタジオ・ジャパンなどが多くなっています。この関東と関西の複合線を旅行業界ではゴールデンルートと称しておりますが、中部地方は若干厳しいです。それから、九州には韓国からの方が多くて、大半がゴルフを楽しみに来る方です。

台湾の方も全体的に伸びていますよというなかで、台湾から日本に来るのにどれくらいお金がかかるかという、台湾の人にしてみれば北陸が一番高く、例えば中国へ行くのは4万2,000円と安いのですが、その倍以上かけて北陸まで来ます。たぶん高山に来るお客さんも北陸に準じた金額になると思いますので、台湾から高山に来るお客さんというのはそういった意味ではお金に余裕のある方が多い、しかもリピーターが多いということになります。

では高山のどんなところに人気があるかという、四季がはっきりしていて、雪が魅力。それから、イメージとしては、一つのところでじっくり楽しみたい人が増えてきているということです。

日本に来た方々が何に満足しているかという、1番は日本の人々が親切、礼儀正しい。これは高山の方にも通じるのです。われわれ美濃の人間が高山に来てよく口にするのが、飛騨ナンバーの車は親切だという話です。岐阜ナンバーだとクラクションを鳴らして走っていくところでも、飛騨ナンバーの方はわりと待っていてくださることが多いです。昨日そういう話をしていたら、「高山は老人が多くて、ふらふらと出てくる人もあって心配だから、みんなスピードを落とすんだ」と言われる。「でも、親切な人が多いですよ。道を聞くと、普通はあっちへ行ってこう行ってと言うだけだけれど、高山の人はちゃんとそこまで連れていってくれるという話もありますよ」と言ったら、「高山の人は口下手だから、自分で説明するよりも連れていったほうが早いんだよ」と謙遜されていましたが、ほかの地域ではそんなことは聞かないですから、これはやはり飛騨高山のブランドだと思います。

高山市さんはハードの部分だけではなくて、心のユニバーサルデザインもやってみえますけれども、皆さんの心のなかにもともとあるいわゆる品格というようなものを発展させるのが、私はこの高山のユニバーサルデザインの可能性なのかなと思います。

鈴木 古田さんからは観光の話が出ましたけれ

ども、高山信金が中央金庫の総合研究所と一緒に調査をしたことを、地元の新聞が「合併から3年」という特集に載せていたなかにおもしろい記事がありました。奥飛騨で住み続けたいという人たちを引きとめている最大の課題が宿泊客の増加だと。つまり観光というものによってそこで生活していける条件をつくっていくことだと言っていたのですが、古田さんがおっしゃったような観光の動きをこれからつくっていくというときに、何をというところは出ましたが、飛騨も含めた新しい高山が、どんな観光戦略、どこをターゲットにした観光戦略というところで、北陸圏との関係ではどうですか。

古田 いろいろ注目しているのが、マラソンのQちゃんはアメリカとか、誰それは昆明でとか、高いところでトレーニングしている方が多いのですが、御嶽山のふもとにもちゃんとした高地トレーニングセンターがございます。

もう一つは、統計を見ていて思ったのですが、今までのどちらかという右左にある建物などを見て帰ればいいという観光から、体験のほうに変わってきているのです。北陸にもいくつか空港があるのですが、北陸はチャーター便が多くて、観光客の方々はほとんどがチャーター便で来るのです。ですから、北陸のほうとも仲良しになって新しい観光ルートをつくっていく。例えば台湾の方にとっては和倉温泉の加賀屋というのが一番人気のブランドになっていまして、加賀屋で1泊し、立山黒部アルペンルートに行き、雪の立山の壁を背景に写真に撮って、それを近所の人に見てもらおうというようなことが一つのステータスになっています。

そういうことで、例えば体験観光として高山祭でかみしもを着て一緒に歩いてもらうとかいろんなことが考えられると思いますが、基本的には体験型、北陸の観光地との提携、それからすでに提携を結んでいる松本との提携を主体にした体験観光というのがこれから考えられるのかなと思います。

鈴木 ありがとうございます。

それでは、もう一度市長に戻りまして、バリアフリーからユニバーサルデザインへと施策の

充実が図られるなかで観光客が多くなっているということでした。最近ではホームページなどへのアクセスを通して、観光情報やバリアフリー情報、それからユニバーサル情報といったことをチェックしてから訪問するというのが当たり前になってきているのですが、市のホームページへのアクセスはどれくらいあるのですか。

土野 ホームページへのアクセスは、特に11言語を入れてから大変多くなったと思います。グーグルの情報をつかまえて、世界中いろんなところからアクセスしていただいているのはわかっているのですが、去年はトータルで628万件というデータが出ておりまして、前年に比べると7%くらい増加しているという状況です。

鈴木 それは旧高山市内の三町をはじめとした歴史的な町並み群なのか、それともほかに何か特徴がありますか。

土野 高山市の観光情報を11言語で入れていまして、市域が広がって魅力のある地域が多くなったということでのアクセスだろうと思います。1回入れれば次から次へといろんなページへいけますので、その部分でアクセス数がどんどん増えてきているのではないかと思います。

鈴木 630万弱のアクセスがあり、430万人の観光客がおみえになる。しかもその7割くらいがリピーターだということですか。

土野 そうです。毎回アンケート調査をしているのですが、大体7割くらいの方がリピーターで、多い方は20回を超えておいでいただいています。

鈴木 なるほど。それほど国際的にも定着してきたというわけですね。古田さんの言葉を借りれば、岐阜というよりも、高山という言葉がもうインターナショナルワードという形で定着をしているということでしょうか。

さて、白石さんは高山は3回目ということですが、実際に訪れてみて、ユニバーサルデザインとかバリアフリーを実感されましたか。本音のところ教えてください。

白石 上一之町あたりは、例えばお店を営んでいる方が車椅子でも取りやすいように商品を陳列して下さっていたり、車椅子が落ちこまな

いように目の細かいグレーチングを敷いていたりということはあるのですが、市全体がどうかとなると、私は市全体を歩きつくしているわけではないですが、こういう地域をほかの地域にも広げていくような努力は必要だと思います。

古田さんがおっしゃったように、物見遊山ではなく、何かを体験するというふうに旅行者の行動が変わりつつあるのであれば、リピーターが増えているなかで、今ある観光の魅力をさらに進化させるとか、リピーターの人たちに次はこういうふうなことをというように積極的に営業していくことが必要なのではないかと思うのです。

ある民間の旅行代理店がクラブツーリズムというのをおやりになっていらっしゃるんですね。あれは、何十年も前に旅行の会員組織をつくると言ったときに、社内ではそんなのうまくいくわけがないだろうと言われたのですが、一度一緒に旅行に行った人たちが次も一緒に行こうとか、有名な添乗員と旅行に行きたいとかいうことで、一緒に行った人たちのネットワークをつくることによって次の行動を誘発するということをやってきたと思うのです。リピーターの人たちを食いとめ、新規参入を増やしていく、この二本立てでものを考えていくとさらに観光客は伸びていくのではないかと感じております。

鈴木 古田さんもしょっちゅう高山、飛騨方面へみえていると思いますが、古田さんは高山のユニバーサルデザインのまちづくりのどんなところに魅力を感じられますか。

古田 高山の中心市街地のユニバーサルデザインは、例えばこの通りはこうですよ、ああですよと市販の地図に出ているので、おお、これはすごいなと思ったわけです。

前々回 JR で高山に来たときに、特急電車が反対側のホームに着いたものですから、エスカレーターもエレベーターも何もない。よっこらよっこら地下道を抜けて上がってこなければならず、ユニバーサルデザインじゃないじゃないかと言ったら、それは JR だから関係ないよと高山市民の方が言われていました。ところが、今回乗った飛騨号は改札口のすぐ隣に着いたの

です。その話のあるホテルの社長さんにしたら、「JR は関係ないといっても、実際には観光客の方が不自由されるから、JR に頼みこんで何とか調整をしてもらったんだ。全部あのホームに止まるわけではないが、改札口の横にとまれば楽だよ」という話をされて、これもすごいなと思いました。

今回のシンポジウムに出るにあたって、特に障害のある方の介護をされている NPO の方々から意見をお聞きしますと、市長さんにはちょっとお耳の痛い話かもしれませんが、やはりそうではない部分もけっこうあるよと。高山のまちのなかには、雪を流しやすくするために若干勾配を設けている通りがあるのです。そういうところで車椅子をとめておくと、ひとりだけで横へ動いてしまうことがある。それから、雪の水を流しやすくするために側溝が覆ってないところもかなりあって、それが障害のある方にとってはけっこう大変だというお話もお聞きしています。市長にしっかりと伝えてくれとおっしゃったのですが、これも程度問題でなかなか難しいのですね。

宣伝になって恐縮ですが、大垣共立銀行の口座をおもちの方にとっては、銀行が365日やっけていて、しかも手数料を取られないというのは当たり前のお話なのです。ところが、口座をもっていない方から見ると、それはすごいねと。それと同じで、ここはよく聞いていただきたいのですが、すごいところに住んでいるとすごくなってしまうのです。違うところから来るとすごいと思うけれども、市民の方は私たちの目から見るとよりもそんなに思ってみえないかもしれません。市長は一生懸命やってみえるけれども、市民の方はこんなもんだらうなと思ってみえるかもしれません。これはたぶん、実際にそこに住んでいると慣れて当たり前になってしまう部分もあるのでなかなか難しいのです。

今はまちを歩いていてけつまずくことが本当になくなりましたね。昔は砂利道でして、自転車で走っていると、自転車が砂利のなかに埋まってしまつて転ぶということがよくあったのですが、アスファルトが当たり前の時代になっ

てくると、もうけつまずかないのが当たり前で、けつまずくと、おかしいよねという話になってくる。それと同じで、あとは程度問題で、何をどこまでやるか。しかも税収は限られています。ほかにもやるのがいっぱいあります。ユニバーサルデザインだけをやっていけばいいわけではないので、そのへんの見極め、観光客も大事だし、実際にまちに住んでいる市民の方も大事で、しかも市民の方々は高齢化してお年を召してくる。そのへんのところも踏まえて何をどうするかということを考えてみるのがベストかと思いますが、やはり高山のユニバーサルデザインはすごいと思います。

鈴木 今日会場に中学生の皆さんがいるのですが、皆さんはユニバーサルデザインという言葉、例えば学校の総合学習の時間などで習いましたか。実は大垣の小学校でも、国語の教科書にユニバーサルデザインという単元がありまして、6年生の子どもたちがそこでユニバーサルデザインの意味を学んでいるわけです。子どもたちは学校で大人の用意したいろんな教材を利用して学び、まちに出れば、またいろんな体験を通してユニバーサルデザインはこういうことなんだと実感をすることができるわけです。

さて、市がいろいろな施策をやるにしても税金がかかりますし限界があると思うのです。そこで民間の企業の皆さんの力を借りてというときに、例えばホテルで使う食器のこと、情報のこと、ホテルの仕様のことなど、ユニバーサルデザインのいろんなやり方があると思うのですが、そういう民間の力を引き出すという点についてはいかがですか。

土野 先ほど申し上げましたように、当初は行政主体でやってきたのですが、特に観光関係の方は、よそからお客様がいらっしゃるものですから、バリアフリーあるいはユニバーサルデザインという考え方は大事だということをいち早くわかっていただいて、ホテルではユニバーサルルームとかバリアフリールーム、目の不自由な方に対してはコントラストルーム、また障害のある方でも大浴場に入れるような設備をつけるとか、あるいはタクシーは乗りやすいような

シートを備えるとかいうことで積極的に対応していただきました。

私どももそれを支援しようということで、補助制度を設けて200万を限度に2分の1を補助する、それから600万円を限度として無利子の融資をするというようなことで対応しております。

しかし、それぞれの企業の方々のいろんな思いもありますし、景気がいい悪いというようなこともあって、思うほどなかなか進まないという面はあるかと思いますが、全体としてはそういうものが進んできたと思います。また、現実には障害をおもちの方々が泊まられたり利用されたりして、非常にいいという評価をいただいておりますので、さらに進んでいくということではあると思いますし、私どもとしてもいろんな面を通じて啓発をさせていただいております。

鈴木 白石さんは世界のいろんな国を訪問され、また日本国内の各都市をご覧になっていて、民間の力をうまく活用してバリアフリーからユニバーサルデザインのまちづくりを進めている事例として、こんなおもしろい取り組みがあるとか、こんなサービスがあるとかいうことはどうでしょうか。

白石 例えば青森の新町商店街というところは、雪深いところで、アーケードはあるのですが、高齢者の方だと買い物に来ていただいても荷物をもって帰るのが大変だったりします。駅から100mくらい続く商店街ですので、公共交通機関を利用して来て、4時までに買い物を終えて300円を払うと、必ず7時までに家まで届けてくれるというようなことをやっています。

そこは駅前ですのでもともと駐車場がない。よく商業者の方は、景気が悪いからとか、天気が悪いからとか、駐車場がないからとか、ないから売上が上がらないと言うのですが、そこは、ないことを逆手にとって、新しい配送手段をつくらうということで、商業者の人たちが配送の仕組みを考えておやりになっていらっしゃる。また、無味乾燥な商店街だったのですが、花いっぱい運動ということで、花壇の手入れを精神障害者の団体をお願いをしたりして、あま

りお金をかけないで、逆転の発想といえますか、ないからあきらめるのではなくて、新しくつくっていかうということをやっています。

駅前にあったビルから地元資本が撤退した後、地下1階に夜11時までやる生鮮食品店を入れた。そうすると観光客にも買っていただけるし、駅で降りた人たちもお買い物をして家に帰れるということで利用する人が増える。それから、4階、5階には図書館があるのです。古田さんがおっしゃったように、地元が活性化するには、人に来てもらわなければいけない。では公共施設をもう一回そこに呼び戻してみようということで、商業施設の上に公共の図書館をつくりました。そして、商業施設も地域の一番手を集めてきたのです。香水が青森一そろっていると、原宿にあるのと同じ若者のブランドをそろえとか、何らか人と違った店を入れるように努力してきたのです。さらに高齢者住宅をその後ろにつくったりして、地域に複合的な機能を持たせつつ、人が集まってくるような仕掛けをつくってきたわけです。人が集まるとその商店街を利用する。多くの人たちが商店街を利用するから、そのためのサービスをというように、次は何をやるか、次は何をやるかということで、これは民間主導でやってきた例です。

熊本では、市民団体が主導してライトレールという路面電車を誘致するのに、ドイツまで見に行ったり、まちづくりマップをつくったりということ、民間の人たちが率先してやっている例でございます。

鈴木 青森と熊本の例を出していただきましたが、こういったところは最近コンパクトシティと呼ばれるようになっていくところなんです。コンパクトシティというと、まちなかに何でも集めてきて、郊外はむしろ切り捨ててしまうという考えかたとして紹介されることもあるようですが、そうではなくて、身近な社会のなかで日常の暮らしが完結できるようにしていくという考えかたなんです。

ですから、ポイントは、身近に例えばスーパーがないとか、学習塾がないとかいったことであるならば、ボランティアやNPOをつくって、

買い物に行けない人の手助けをしようとか、学習塾がないのだったら、昔取ったきねづかでお年寄りが子どもたちの勉強のお世話をするとかいう形で、地域のなかで助け合いの関係をしっかりつくって、足りないものをお互いに補い合っている関係性を近隣地域のなかにつくっていかうというのがコンパクトシティのもともとの考えかたです。そのなかでとても大事なのがユニバーサルデザインの考えかただと思うのです。

さて、このユニバーサルデザインは「思いやりのデザイン」ともいわれます。高山は町内会組織をはじめとして地縁組織が非常にしっかりとありました。だからこそ伝統文化を守り育て、それをきらびやかにして観光資源として生かしてこられたのだといわれますが、実際のところ、これだけ大きなまちになって、町内会をはじめとした地縁組織が実際に機能しているのか、それとも何か問題があるのでしょうか。

土野 もともと高山というのは地縁血縁の強い地域ですから、そういう意味ではそんなに飛び外れたようなことはないのですが、最近の傾向としてやはり町内会への加入が悪くなってきて、たしか70%台になっております。そういう意味で、災害時などの情報連絡あるいはお互いの助け合いというような点で問題が出てきているのではないかとということで、特に町内会連合会のほうで力を入れて町内会加入推進ということで努力していただいております。私も行政としてもそういうものに加入していただけるようにいろいろとお願いをしているという状況です。

ただ、こういう時代になってきますと、特に単身赴任でいらっしゃる方や子どもさんのいない方はわりと難しいのです。子どもさんが学校へ行くようになってくると、やはりつきあいの関係で入ってくるというようなことはあるのですが、そういう点が一つ問題としてはあります。

私どもが特に心配しているのは、大きな地震などの場合に、高齢者の方とか障害のある方たちの救出とか、お互いの助け合いをするのに、

町内会という組織を使わないとうまくいかない面が非常に多いと思うのです。ですから、町内会という連帯組織を通じてうまくそういうことができるようにということで努力していただいているところです。

鈴木 限界集落という言葉が、65歳以上の方が50%以上住んでいるところという簡単な定義で使われています。これは私の嫌いな言葉でして、本当はそんなものではないと思うのですが、高山もそのような地域が多くなっていると聞いています。そういう地域では小・中学校の統廃合なども進んでいるという現実があるとすると、学校に入ったら新しい地域の関係ができるというところも少し心もとないのではないかと思います。だからこそあえて市民の方たちにこういう形でお互いの助け合いの関係をつくってもらえたらいいのだがというようなことはありますか。

土野 限界集落という言葉はあまりいい言葉ではないというのはそのとおりだと思いますが、合併をして高山市には山間の集落が約136ほどございますが、そのうちの16集落が高齢化率50%以上のいわゆる限界集落といわれる集落になります。そういうところは、農地の荒廃とか山林の荒廃、あるいは農業をやっていても獣害があるとか、いろんなことで住みにくくなってきている。それから、高齢化が進んでいますので、足の確保がなかなか難しいというようなことがございます。

私どもとしては、足の確保ということでは、合併地域内を巡回する無料バスとか、合併地域間を結ぶバスを行政の責任で連結させてカバーしております。しかし、根本的にはそういうことでは解決ができないので、そういう集落をどうするかということで、今年度は少し予算をかけて実態調査をし対応を検討していきたいと思っております。

それから、学校の統廃合のことですが、合併してこの3月31日で2校が廃校になるわけですが、これは合理化で廃校するのではなく、親御さんたちのなかに、子どもの将来のことを考えると、あまり少人数の学校では団体活

動とか競争力の問題とかいろいろ課題があるので、隣の旧町村の学校へ統合してほしいというご要望があって統合することになりました。それで6校ほど廃校になります。極端なのは、旧高根村は中学校1校と小学校が2校あったのですが、これが3月31日で全部なくなるというような状況がございます。しかし、地域の核として学校の存在意義は大きいと思うので、今後の地域の活性化のための対応が重要だということで、そのことについては私どもも一生懸命対応策を考えているところでございます。

鈴木 厳しい現実があるわけですが、だからこそ市民の皆さんのいろんなニーズを直接聞きながら、また市民の皆さんが、サービスの受け手としてだけではなくて、サービスの担い手ということでも力を出せるような仕組みも考えていかなくはいけないというお話だったと思います。

白石さん、各地で過疎化、高齢化等で集落がなくなっていくなかで、それでもがんばって暮らしている若い世代がいる。例えば健診とか医療サービスとか学校のこととか、いろんなサービスを受けたくてもなかなか身近では難しいというなかで、あえて挑戦をして人間関係をつくり、生活していく基盤を自らつくり出しているという個人とかNPOの取り組みはありませんか。

白石 高齢者世帯率が5割を超えているある集落では、朝、黄色のハンカチを物干しにぶら下げておいて、夕方それを取り込む。そうすると通学をしていく中学生とか、水産工場にパートに行く奥さんたちが見て、「あ、出ている」と。夕方それが取り込まれていれば元気だという合図なのです。わざわざ行って「おばあちゃん、どう？」というのは暑苦しい関係ですけれども、ぶら下げてあったら大丈夫だということで安否確認をするという原始的な方法をとっているところもあれば、象印の魔法瓶などを使って、人間というのはいけば必ず1回はお茶を飲みますから、一定時間魔法瓶が使われないと信号が保健所に行くようになってきているというように、少しハイテクを使って確認をしたり、徳島県の上

勝町は「いろどり」という刺身のつまを採っているお年寄りのことが有名ですが、ここではテレビ電話を使った安否確認を始めようとしています。

ただ、私は、それは対処療法であって、高齢者比率が相当高くなっていくと、医療の問題などを考えるとなかなか難しいのではないかと思います。やはり中、長期的には集落全体で住みかえるというようなことも含めて考えていく必要があるのではないかと思います。

最近、個人情報関係でどこに誰が住んでいらっしゃるかというのがなかなか行政の枠を超えて把握できないそうです。介護保険を担当していらっしゃる課は、どこに高齢者がいて、その人の介護度はどれくらいかというのがわかっているのですが、これを防災のほうと共有しようとなると、それは個人情報なので出ない。

荒川区は東京都内では自治会の組織率がすごく高いのですが、ここでは「おんぶ作戦」というのをやっています。ふだん機能しないものは災害時も機能しないのですね。ふだんからどこに誰が住んでいるかわからないものを、災害のときに助けに行くなどということではできないわけです。阪神・淡路大震災のときは、がれきの下から助けられた人たちの8割がご近所の人に救われていますので、日ごろのつながりがとても大事だということで、「おんぶ作戦」といって、いざというとき誰が誰をおんぶして逃げるかということを決めておいて、ふだんから防災の日などにトレーニングをしているのです。

ただ、ここでも町内会・自治会を組織している人がだんだん高齢化して、どっちがおんぶをしたらいかわからないくらいになってきているので、何か別の新しい仕組みを考えていかなければと言っておられます。

ハイテクの話なのですが、この間、遠野市長の本田さんにお目にかかったら、遠野も県立の遠野病院がなくなって、今は釜石病院でしか分娩をやっていない。妊婦さんは子どもを産むまでに14回病院にかかるのが通常なのです。最近はお金がないから検診に行けない人が増えていて、駆け込み出産というのが多くなっているの

ですが、遠野では、光ファイバーを使って赤ちゃんの心音とか映像を県立釜石病院に送って、遠野にいる助産師の人たちがそれを見ながらお医者さんの指示を得て妊産婦さんにアドバイスをするというように、遠隔地にいながらパソコンを使って妊産婦の診療をやっています。分娩はさすがにできませんが、例えば病院に行かなければ薬がもらえないということではなく、投薬指導がテレビ電話でできるとかいうことも含めて、これから可能性があるのではないかと思います。

鈴木 古田さんのお話に、どんどん道路交通網がよくなって広域化しているということがありました。今の白石さんの話との関係でいうと、行政の区域のなかだけで何でも完結するのはちょっと難しくなっている。市民のニーズが多様化し、生活圏が広がるならば、行政がすべきことも、例えば連携してとか、隣の市や隣の県の教育サービスとか医療のサービスということもこれから必要になってくるのではないかと、そういったことにも行政は柔軟に対応することが必要だというお話でしたが、そういった例は実際にありますか。

古田 小学校の校区というのは、情情的つながりのある一番大きい区域だと思うのです。私がボランティアをやっている地域でも子どもたちがどんどん減っている。でも、困ったねと言っているだけではだめなので、子ども一人ひとりの能力を高めれば一緒ではないかということで、土曜日にもものづくり教室などをやって、理科系人材を少しでも増やして、将来は製造業のほうに入ってロケットとかロボットをつくってもらいたというのでいろいろやっています。それが成果に結びつくかどうかわかりませんが、これは校区の単位なのです。

小学校が一つつぶれるということは、そういう情情的なつきあいの単位が一つ減ってしまうということに近い。それからもう一つは、何か災害が起こったときに学校が逃げ場所とか拠点になっているところが多くて、そういった意味でもなかなか厳しいなと思います。

実は市長の話聞きながら、ソ連の教育シス

テムの話をちょっと思い出していました。何かというと、あちらは遊牧民が多くて、ふつうの学校というのは成立しないので何をやったかということ、ヘリコプターに先生を乗せて、遊牧民が移動するたびに先生が追いかけて行って教えたのです。私も学校で教育の権利と義務というのを習いましたが、教育というのはそれほど大事だと思うのです。

しかし、こういうご時勢だから統廃合も仕方がない。でも、そうになったら近隣の方のおつきあいをもっと太くしようねということですね。特に若い人に必要最低限のおつきあいがしない方が増えている。そういう方が会社へ入ってくると、嫌いな人とつきあいができないものだから、すぐに辞めてフリーターになってしまうという事例が増えています。社会的にもそういうことがあるなかで、思いやりをもった地域のつながりというのはこれからますます重要になってくると思いますから、政治とか行政とかいうものを頼りにするのではなくて、自らも積極的につながりをつくっていく必要があるのかなと思います。

鈴木 ありがとうございます。

ユニバーサルデザインは、誰もが暮らしていくうえで必要なサービス、あるいはもの、製品、さらには公共交通機関とかいったものを、すべての人たちのニーズを踏まえて用意していこうということなわけですがけれども、高山のように合併して大きなまちになったところでは、それが等しく行政の側から提供できるわけではない。しかし、場合によってはそこに一つの可能性があるかもしれない。先ほどのお話にあったように、民間の力を生かすにはどうしたらいいのか、さらに市民の皆さんの知恵やネットワークを活用するにはどうしたらいいのか、そこに思いをはせてその力を引き出す支援体制というのを、ここで本気で行政側が考える。つまり直接支援から間接支援といったことがこれからは必要なのかもしれません。

さて、今日はたくさんの市民の皆さんにお越しいただいていますので、ここからは皆さんからパネラーの方々に質問とかご意見をいただ

うと思います。中学生の皆さんもわからないことがあったらぜひ聞いてみてください。

では最初の方をお願いします。



フロアからの発言

ミヤグチ (高山市) 高山市内のミヤグチと申します。私は公務員をやりまして、60歳で定年、その後町内会の役とか福祉のボランティア活動、高齢者福祉の問題などにかかわってきました。

私は、けさ7時の特急で岐阜まで行って、また次の特急に乗ってここまで帰ってきましたが、高山駅に近づくと、JRのご案内で、三大奇祭のこと、白川郷のお話、それから高山の乗鞍が美しいという放送がかかります。高山市民憲章にも「私たちは乗鞍のふもと、山も水もうつくしい飛騨高山市民です」「子どもをすこやかに育てましょう」ということがありますし、また高山市の歌もあって、歴史のあるまち、希望のまち、平和のまちと、まさに今の高山を表現しているのですが、そういうところでわれわれは暮らしているわけです。

そこで私は、白石先生には民の可能性と官の限界ということでお伺いしたいのですが、私たちは、自治省のほうの関係で、四、五年前に高山の福祉のまち策定委員会という実行委員会をつくって、合併する前の市町村、そこで働く方々、それからまったくのボランティア、民間などから100人ほどが集まって、例えば高齢者の問題、障害者の問題、子育ての問題、それから10市町村が一緒になりましたから地域格差の問題について、手弁当で何十回か委員会をやり

ました。そうしてまとめたものを市長さんにもご案内し、行政のほうへもお渡ししたのですが、一向にその効果が出てないような気がするのです。ですから、市民としてはこれからどのような高山のまちづくりを担っていったらいいかという質問なのですが。

白石 ご質問の内容は、策定委員会で検討したものがなかなか実現に移っていないのだからいかなものかということですから、市長さんがお答えになるほうがいいのかもしれませんが、委員会形式で出た意見というのは、その委員会が立ち上がる前に、行政としていただいたご意見をどのように活用するかということをお約束しているはずだと思うのです。すべて100%ではなく、いただいた意見を参考にしながら、事業を進めるうえでそのエッセンスだけとらせていただくという可能性もありますし、今年は無理だから何年かに分けてやりましょうという形の約束かもしれない。その前提がわからないのですが、私は、せつかく住民参加のなかで策定していただいた結論を、行政には生かしていただきたいと思います。いちどきに100%というのはなかなか難しいと思いますので、目標年次とか目標レベルをきちっと明確にしながら、できないのであればきちっと説明を果たす。できて安心しているのではなく、また同じような組織を活用しながらフォローアップしていただくことが必要なのではないかと感じております。

ミヤグチ 古田先生は人づくりということをおっしゃったのですが、国内から400万人以上、それから外国人も13万人以上観光客が来るようなまちになりました。ですが、高校や大学を卒業した人たちの働く場が少ない。昨日も「働く場所がないので子どもが帰ってこれない」とおっしゃる方がいましたが、何とか企業誘致をしてまちが潤うようなことを考えてほしいわけですが、そのあたり、高山の可能性はどうでしょうか。

古田 企業誘致は私の専門でございまして、今までは団地をつくってどんどん企業を呼びましようという話をしてきたのですが、最近是人

が集まらなくなってしまっていてなかなか厳しいようです。西濃などでも人が集まらなくて困っている状況です。

ただ、高山の場合は正直いって企業が来る条件は厳しいです。企業が会社をつくるときのポイントは、土地の値段が安いかどうか、それからアクセス、三つ目は地域の天候状況、もう一つは人が集まるかどうかです。

そういう面から見ると、高山にもものづくりの工場がすぐ来るかということ、なかなか厳しいです。例えばトヨタ自動車の部品工場が来るかどうかとなると、トヨタ自動車そのものがほんと近くに来れば可能性もあるかもしれませんが、単体で来るというのはアクセスの問題があって非常に厳しいのです。なぜアクセスがそんなに大事かということ、トヨタ以外の会社でもみんなトヨタ生産方式で、何時何分にこれこれの製品を届けなさいという条件で動いているわけですから、事故があつたり、雪が降つたりしてそれがだめだということになると、そのトヨタ生産方式が成り立たなくなります。ですから、それができるかどうかが一番優先の条件になりますので、例えば今度新名神高速道路ができた三重県などはいいのですが、高山へ来る道が仮にできたところで、北陸にはそういう会社はあまりないものですからちょっと厳しい。

では何がいいかということ、私は個人的にはITなどはないと思います。揖斐郡に谷汲村というのがありましたが、そこでは小学校を卒業するまでにホームページがつくれるようにしました。そうすると、彼らは就職のときは東京のITの関係とかに入るかもしれないけれども、ソフトの世界というのはどんどん変わっていますので、光ケーブルを通せば別に地元でも起業できます。僕はそういうことであれば、100人の卒業生のうち1人か2人帰ってくれば大成功だと思います。

ただ、ものづくりのほうが経済波及効果は大きいですから、それが来れば一番いいのですが、車の関係だとちょっと厳しい。むしろ林業用ロボットのようなものは可能性があるかもしれません。共立総研も早稲田大学 WABOT 研究所

と共同で林業用ロボットの研究をやったことがあるのです。登って行って木を切るロボットはできて、次に間伐材を運んでくるロボットをつくることで頓挫したのですが、そういうのがうまくできるようになればいいなと思います。
鈴木 ありがとうございます。

では次の方をお願いします。

マツイ マツイといいます。お話のなかで、高山はこれから観光が大事な収入源になる、収入がないとユニバーサルデザインも進めていけないということだったのですが、僕のような五体満足な者から見ると、ユニバーサルデザインということと、古きよき高山の観光というのは、一歩間違えると矛盾していく可能性があるような気がするのですが、高山らしいユニバーサルデザインということとどのようなことがあるのか教えていただければありがたいです。

鈴木 それでは白石さんからお願いします。

白石 古きよき高山と、そこに新しいユニバーサルデザインをつけていくのは矛盾するかどうかというご質問の趣旨だと思うのですが、私は必ずしも矛盾はしないと思うのですね。大阪に生駒という山がありますが、その登山道に山肌を切り取って手すりをつけたのです。それを遠景から眺めてみると、どうも緑のところと白の手すりがあるというのは違和感がある。どうしてあれを木の手すりにしなかったのだという議論がその直後に起こりました。

私は、すべての人が利用できるような機能とかデザインというのは、できたらつけたほうがいいということではなくて、やはり必須のものだと思います。そこに利用できないような何かハードルがあるのであれば、できるかぎりそれを取り除く努力をするべきですが、しかし、その取り除く努力のなかで、やはり景観に調和したものや、その歴史に配慮したデザインを最大限考えていく必要があるのではないかと思います。

長野オリンピックのときに、一時的ではございましたけれども、善光寺にもスロープがつけました。正面ではなく、裏側にスロープがついて、車椅子の人たちも善光寺に参拝ができるよ

うにして、オリンピックが終わった後それを外したのですけれども、そういう工夫はできるのではないかと思います。デザインに配慮をしたり、設置の仕方に配慮をしたり、これは建築の専門家やデザイナーの知恵を借りていくべきことだと思いますが、私は相矛盾するものではなく、調和させていくというのは重要な課題であるというふうに認識しています。

鈴木 古田さんからもお願いします。

古田 実は昨日お聞きしたなかで、うちは観光で生活していないよという社長さんが、今高山市に問われているのは、政策の総点検みたいなことではないかと。要は観光で飯を食っている人もいるし、そうでない人もいる。例えば高山祭は、別に観光で飯を食っていない人も、会社を休んでかみしもを着てみんなと一緒に歩いて回らなければいけない。これが負担でしょうがないという方がみえるかもしれません。うちは観光で飯を食っているから、それは大歓迎という人もみえるかもしれません。高山祭の屋台を引っ張るのもけっこう大変ですし、京都の葵時代祭のように学生にああいう格好をさせてやるのかという問題もあります。

「合併した周辺の町村の方々は何を考えているかよくわからないということもあるので、政策総点検というと語弊があるかもしれないが、要はみんなのコンセンサス、どのへんに残すべき習慣、残すべき雰囲気、伝統があって、これはもういいんじゃないのというのは何なのか。そのへんを見直すいい機会なのではないか。逆にそれをきちっとやることによって、100年後の高山はこうなるよというのがある程度市民レベルでできるのではないか」という話をされましたが、私もそうかなと思います。

鈴木 ありがとうございます。

あとお一人だけになりますが、お願いします。タカオ タカオと申します。本日のシンポジウムは非常に参考になる点がございました。ありがとうございます。鈴木さんの司会が非常にやさしい心なごむトーンで感心いたしました。

私の質問は大した質問ではないのですが、白石さんご紹介のなかで「テレビの向こうから

来ていただきました」というのがあったのですが、どんな番組が教えていただければと思います。

鈴木 意外な質問ですが、白石さんどうですか。
白石 私が出ているテレビはいくつかありまして、メインは『スーパーモーニング』というテレビ朝日系列の番組でございます。朝8時から10時、地域によっては8時半からオンエアされる場所もありますので、男性方はもう家をお出になってしまった後で、奥様方によくご覧いただいている番組です。もう一つは、読売テレビでやっている『ウェークアップ』という辛坊治郎さんの土曜日の番組でございます。いずれもコメンテーターということで、芸能から政治から外交からいろいろあって、それにあれこれコメントするという役ですが、そういうことは私の性分に合っていないので実は嫌なのです。

ただ、メディアのネームバリューというか、影響力は相当大きくて、私の所属しております学校からはぜひ出てほしいと。関西大学という名前が10秒出るだけで相当の経済波及効果があるそうございまして、ご要望があるのでいたしかたなしということですが、機会がございましたらぜひご覧いただければと思います。

鈴木 ご質問の趣旨がよくわかりました。私もテレビを通してユニバーサルデザインというキーワードを察知することが多かったので、ぜひテレビを通していろんな情報を収集してください。

これで皆さんからいただく質問の時間はなくなってしまうかもしれません。そろそろまとめに入らせていただいてもよろしいでしょうか。

今日は遠方から白石さんに来ていただきました。また大垣からは古田さんにも来ていただきました。お2人は、市長のユニバーサルデザインをめぐる施策の紹介や、会場にお越しの市民の皆さんのご発言、あるいはお泊りになって、高山市のユニバーサルデザインのまちづくりをめぐる、市民の方がいろんなお考えを持ってみえるということを実感されたと思います。そんなことを踏まえて、これからの高山市のユニバーサルデザインのまちづくり、人づくりと

いったことについて、期待もこめて一言ずつお願いします。



まとめの発言

古田 何度でも言いますが、実際にからだに障害のある方は、ここをちょっとやってくれるだけで私は助かるんだけどというような思いをしっかりと発信して、それから、健常の方はいつかはわが身ということをお思いになられて、そういう方々の声に真摯に耳を傾け、誰もが住みよいまちづくりをしていただきたいと思います。昨日もNPOの方のところでビデオを見せていただいて、本当にそれを実感しました。健常者であれば気にならないようなことが、車椅子の方などにはすごく大変なのですね。特に高山市内ではNPOの方が盛んに活動しておりますので、そのへんのちょっとした声にも耳を傾けていただければと思います。

なおかつ、今は何でも行政に頼ろうとか、行政がだめだと今度は企業にやってよという話が多いのですが、私はケネディ大統領の就任演説をいつも思い出すのです。彼は「国家が君のために何をしてくれるかよりも、君が国家のために何ができるかを考えなさい」と言ったのですが、「国家」のところを「高山市」に置き換えていただければ、おのずと答えは見えてくるのかなと。

飛騨高山というのは本当に岐阜県最強のブランドだと思います。飛騨高山というと、格式の高い品格あるまちとして、歴史と伝統の雰囲気がかもし出されると思うのです。そういうところに住んでいるのだというプライドと、将来の

夢と、もう一つは、高山市に代表される思いやりの心をこれからも大事にしていければ、ますます住んでいる人が住みやすいまちになるのではないかと思います。ぜひがんばってください。

白石 ケネディも難しいことを言ったと思うのですが、私は日本の福沢諭吉がお礼も含めて大好きなのですが、彼は「国を頼らず国を支える」と言いました。これを「高山市」というふう置き換えてもいいかもしれません。

私が申し上げたいことは、去年くらいから復古主義といいますか、『三丁目の夕日』がはやったり、現代人は昔のものに少しずつ帰りつつあるのではないかと。急成長で発達してきた世の中とは逆に、もう少しいやしとかゆとりとか、古きよきものとかいうものに回帰しつつあるのではないかと思います。すごくストレスが多く、人間関係も複雑になっていくなかで、住むところや暮らし方にも一辺倒ではない考え方が少し出てきているのではないかと思います。そういう点では、この高山には、何かほっとするような落ちつきとか、古きよき町並みとか、人々の心の温かさとかいう、しっかりと成熟したよき地域を目指していただきたいと思います。

私は東京で仕事をして東京に住んでいるのですが、たぶん60になったらあそこでは暮らせないと思います。変化のスピードが速すぎて、複雑で非常にわかりにくい都市でございます。多くの人のなかには晴耕雨読といいますか、65歳を過ぎれば地方に住んでみたいという人たちが増えてきていると思うのです。こういうときがまた一つのチャンスかと思っておりますので、ぜひ落ちついた美しい都市を目指していただきたいと思っております。

鈴木 ありがとうございます。

では最後に、市長からこれからの市政についての豊富を述べていただいとまとめにしたいと思います。

土野 先ほどいろいろご質問がありましたなかに、高山の伝統的なものとユニバーサルデザインの関係というお話がありました。私は、やはり伝統的なもの、あるいは伝統的な建造物とか

文化というものは大事にしていかななくてはいけないと思いますが、ユニバーサルデザインというのは、白石さんがおっしゃったように、ハードということだけではなくて心構えということだろうと思うのです。ですから、そういう気持ちをもってまちづくりをしていくことが大切ではないかと思っています。

それから、観光で飯を食っている食っていないというお話がありました。確かにストレートにはそうではない方もあるかと思いますが、現在の高山市の観光の直接所得は750億近くだと思います。観光というのは非常にすそ野の広い産業で、あらゆる産業に影響するわけです。たしか共立総研でやっていただいたと思いますが、2.3倍という波及効果が出ておりますので、観光で1,600~1,700億の経済効果を出しているということですから、やはり間接的にいろんな面で市民生活に大きくかかっているのだろうと思います。

そういう意味で、高山には昔から旅の人を大切にするという心があったわけですから、そういう気持ちをもってこれからの観光というものに接していただければ、それがまさにユニバーサルデザインではないかという気がするわけです。私ももそういうことを常に念頭に置きながら、またいろいろなご意見を聞きながら、「住みよいまちは 行きよいまち」という気持ちで高山のまちづくりをやっていきたいと思っております。

鈴木 ありがとうございます。

市長には、第7次総合計画の基本理念である「住みよいまちは 行きよいまち」という言葉を、最後のしめくりに使っていただきました。住みよいまちというのは、行政が公共投資を通して生活基盤をつくっていく、いろんな社会サービスをつくっていくということで実現する部分もあります。しかし、合併して大きなまちになり、そのなかで住民の暮らしを支えなければいけないということになると、優先順位がやはりできてくる。そうすると、行政が主導する部分と、民間にお願いをしてその力を活用させていただく部分とがさまざまあるのだろうと思

います。

住みよいまちというのは行政主導ではなくて、むしろ民間の企業が新しい市場や雇用の機会をつくるという可能性をもって担っていくという部分もあるでしょう。そして高山は、お話にありましたように、町内会あるいはNPOや市民活動、それから社協など、さまざまな地域社会を担う住民の助け合いの関係があります。住みよいまちは行政や企業と同時に、住民の力の連帯によってつくり上げていくことができるものであるだろうと思います。

むしろ行政はそういうことを積極的に支援して、民が力を発揮できる環境づくりのところで知恵と労力を使っていく、資金を使っていくということがこれからは必要になってくる。そういう民と行政との協働のまちづくりということが住みよいまちをつくり、ユニバーサルデザインがそういう取り組みを通してこの高山の取り組みを世界に発信し、外国から訪れる方たちに今度は行きよいまちとしてアピールするのではないかと思います。

今話したことはすべて今日前にいる中学生のみんなの作文を読ませていただいて得たヒントばかりで、自分のオリジナリティは一つもありません。最後にネタ話をして終えたいと思います。

今日はお忙しいなか、市長をはじめ白石さん、古田さんに貴重なお話をいただきました。どうもありがとうございます。改めてお礼を申し上げます。

また、会場の皆さんも足元の悪いなかたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。

した。

それでは、本日のシンポジウムはこれで終わりたいと思います。



